
ハート・フィール

島田彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハート・ファイル

【Nコード】

N7245A

【作者名】

島田彰

【あらすじ】

初めての彼氏と付き合い始めて2ヶ月。葵は、楽しみにしていた夏休み前に突然、別れを告げられてしまった。

プロローグ

「別れよう」

七月に入って初めての日曜日のデート。映画を見た後、ちよつと休むために入ったカフェで大事な話があると切り出され、彼氏である遊馬健吾にそう告げられた葵は、黙ったまま言葉を失った。その言葉の意味を理解するのに、数秒を要した。

健吾は続けて何か理由を話していたようだが、葵の耳には入っておらず、その目はただ宙を漂っていた。家を出たときには青い空と白い雲を見上げて夏を感じ、もうすぐ来る夏休みにはどこに連れて行ってくれるのかなと思いを馳せていたのに、こんなことを言われるなど夢にも思わなかった。

「おい。聞いているのか？」

オレンジジュースが入っているグラスの氷が、涼しげな音を立てて崩れた。

「え？え」と。もう一回「

あのなあ。はつきり言っと、お前に飽きたんだ。だから、明日からはただの同級生に戻ろうってことだ」

葵の頭の中は真っ白になった。健吾の声、他の客が話している声、何もかもが耳からシャットアウトされ、健吾の口に合わせて、ただ頷くことしか出来なかった。

店を出て家に帰り部屋のベッドに腰を下ろすと、この二ヶ月半の出来事が思い出された。

「お帰り」

ドアの向こうから妹の声がしたが、返事は出来なかった。氷のように固まっていた身体を倒して枕に顔を埋めると、今まで一滴も出ていなかった涙が止めどもなく溢れてきた。

第一章 一　く出会い

高校に入学したばかりの四月中旬。

葵が通っている夕凧学園は結構有名な私立高校で、何かしら特技を持った生徒のみが入学することが出来る。中学から高校へイレベーター式だから中学受験で人気があつたが、勉強が出来ることは重要視されていなく、様々な一芸を持った生徒が通っていた。

一般的なのは運動関係で、全国大会出場の実績を持った者がごろごろいるし、例えば出ていなくとも実力があれば受験資格が認められた。運動以外には書道やソロバンで段持ちであるとか、何らかの特技で有名になつた者、変わったのだと格闘ゲーム大会で日本一になつた者などもいた。そんな変わった校風の学校は、芸能関係の仕事をしている生徒にも寛大で、芸能科も一クラスだけあつた。

ちなみに水瀬姉妹は高校からの編入組だ。葵は料理番組で優勝したことがあり、茜はバスケットの全国大会で活躍したことが認められて入学した。

「葵、早く、早く。置いていくよ」

「ま、待つて、茜ちゃん」

葵は、前を走る双子の妹の水瀬茜に急かされて悲鳴を上げた。

朝に弱い葵は、朝寝坊をすることがしばしばあつた。そんな姉を早起きの妹が何度も起こすのだが、「いま起きるよ」などと言つてなかなか起きないので、こうして走ることが小学校の頃から日常茶飯事だった。

「ほら、あと五分だよ。頑張つて。門を閉められちゃうよ」

「五分あれば、大丈夫よ」

いつもギリギリだが、まだ一度も遅刻したことはなかった。ここまで来ていれば、あと三分で着くというのが分かっている葵は内心余裕だった。

葵の予想通り間に合った二人は、無事に門で見張っている先生に

挨拶をして校内に入った。

「ほら間に合ったでしょう」

「そんなに得意気に言わないの。いつもギリギリなんだよ。危なっかしいなあ」

安堵しながら歩いている二人の後ろから、けたたましいエンジン音を上げる車が暴走して突っ込んできた。

「きゃあ」

茜が振り返ったときには、すぐそこまで迫ってきていて、金切り音を上げて数センチ横に急停車した。身の危険を感じて一瞬凍り付いた茜は、無事だったことに深く息を吐いた。そして、目を大きく見開いて運転席に向かって叫んだ。

「危ないわね。殺す気？」

「すみません。お怪我はありませんか。すみません。すみません」
運転席から出てきたのは眼鏡を掛けた女性で、とても腰が低かった。何度も頭を下げるので気を削がれてしまい、怒りはすぐにおさまっていた。

「え」と。もう分かりましたから」

「いえ、急いでいたとはいえ、なんとお詫びをしてよいのか」

ひたすらに低姿勢の女性に向かって、車の反対側から苛ついた声
が突き刺さった。

「もう良いだろう、マネージャー！。早く帰れよ」

それは、助手席から出てきた男から発せられた。

制服を着ているので、生徒だというのはすぐに分かった。ブレザーの襟に光る襟章が目がいく。それは芸能科を示す襟章だった。芸能科だけあって女受けしそうな顔立ちだったが、今の言動を聞くと冷たい感じが否めなかった。

「もう十分謝っただろう。なあ」

そう言って面倒くさそうに茜を見る。

「う、うん。もう良いですから」

「そうですか？じゃ、じゃあ、失礼します。遊馬君、一時に迎えに

くるから」

すでに歩き出していた健吾の背中に言うと、さっさと行けと言わんばかりに手を振っていた。

「それでは失礼します」

マネージャーの女性は一礼すると、車に乗り帰っていった。その時、HRの時間を告げるチャイムが鳴った。

「いけない。急がないと。ほら、葵」

「え、ええ」

二人は健吾の後を追うように校舎へと入った。

初めて会ったときの、葵の健吾に対する第一印象は、

素っ気ない人。

だった。

その日の昼休み、同じクラスの葵と茜は、いつものように一緒にお弁当を広げた。

葵の前の席の生徒は毎日学食に行くため、茜がそこに座る。赤と青、それぞれの包みを広げて蓋を開けると当然、同じ中身の弁当が並んだ。

「ほら、茜ちゃん。ちゃんといただきます、を言って」

早速、箸を付けようとした茜の手を叩いてたしなめる。

「体育で張り切ったから、お腹空いてるの」

「ダメよ」

「分かったよ。いただきます」

「はい。いただきます」

手を合わせて、お弁当を作ってくれた母親に感謝の意をあらわす。水瀬家は両親とも健在であるが、共働きのため家事の半分以上は葵がやっている。母親はそれに感謝しているし、甘えている部分もある。だから、せめて母親らしいことをしたくて、毎日四人分のお弁当を作っている。

「そうそう、葵」

茜はセロリスティックを口にくわえながら、モゴモゴと言った。

「だらしないからやめなさい」

「はい」

「で、なあに？」

茜はウサギかハムスターのように前歯で小刻みに嚙って一本食べた。

「だから、女の子はそういうことしないの」

「まあまあ」

手のひらを差し出して、頬を膨らましている葵を制した。

「朝、会った男がいるでしょ。あの男のこと梨奈が知っていたのよ。まだデビューしたてのタレントみたいんだけど。まだ顔が知れてないし、売り出し中なんだって」

「そうなの」

梨奈というのは隣のクラスの娘で、体育など合同授業で一緒になることがある。入学してすぐに茜と友達になり、葵も親しくしている。

梨奈はサツパリとした性格のボーイッシュな娘で、女子にも人気があった。本名が雲雀梨奈という何とも芸名っぽい名字なのだが何を隠そう、といっても隠してはいないのだが、元アイドルでけっこう人気があるグループのメインボーカルを務めていた。二年前に本人の都合で卒業という形で引退している。

「名前は遊馬健吾。身長百七十六センチ、体重六十七キロ、成績は中の上、運動神経は良いみたい……。あんまり興味なさそうだね」

葵が手を止めることなく黙々と箸を動かしているの、もうちょっとと食い付いてくると思っていた茜は面白くなさそうに言った。

「興味ないから」

「そうなの？ふうん」

そこにパンと牛乳パックを持った梨奈が現れた。隣の席の机に腰掛けて、葵の顔を覗き込んだ。

「ホント、葵ちゃんは男っ気がないんだから」

カツサンドの袋を開けて、ガブリと頬張る。

「そうなのよ。あつ、梨奈。牛乳頂戴」

茜は、セロリと同じくらい牛乳が好きだった。バスケット選手として、もう少し身長が欲しかったから、小さい頃から毎日飲んでいる。

「良いけど、一口だけだよ」

「もち」

と言いながらストローを紙パックに刺すと、大きく息を吐いて思いつき吸い込んだ。

「あゝ、こらあ」

梨奈は紙パックを潰さないように奪い返すと、中身を透かしてみた。

「半分も飲むなんて、ヒドイ」

「一口だもん」

「いつもゴメンね。代わりに食べて」

口を尖らせる梨奈に、葵がフォロースる。同じ乳製品ということ でチーズを摘んで、梨奈の口に持っていた。

「ありがとう」

遠慮なしに頂くと、改めてこの双子の性格の違いを再認識したりする。

「ホント葵は、男に縁がないから」

茜は、何もなかったかのように話を続ける。そんな茜に不満顔の 梨奈だったが、いつものことだと割り切った。

「まあ、あんな冷たそうな奴。売れずに消えていくよね」

「友達から聞いた話だと、冷たい感じはしなかったけど」

第一印象だけで決めつける茜に、梨奈が反論した。

特に興味がない葵は、その話題に加わることはなく代わりに、さつき二人が言った自分は男に縁がないというのに反応した。

「梨奈ちゃんはともかく、茜だって男の子に縁なんてないでしょう」

「わたし？あるよ」

「え？」

妹の言葉に衝撃を受けて梨奈の方を見ると、うんうんと頷いていた。

「あるもなにも。茜、今日まで何人に告白されたんだっけ？」

「三人……かな」

「告白？私たち四月に入っただけだよ」

そんなことは全然話してくれないので、初めて聞く事実に関胸の中心で鐘の音が鳴り響いた。

「まあ全員、断ったけど。私は御堂先輩命だから」

「御堂先輩って確か、同じ中学の一つ上の？」

その先輩の話は、葵も聞いたことがある。確か、今年のバレンタインもチョコを用意して、学校で渡せないから郵送していた。

「そう。その御堂先輩」

トロンとした瞳で手を組むと、どこか遠くを見つめる。

御堂先輩がこの高校に入学したから、追い掛けるために全国大会でも頑張れた。

「おーい。帰ってこーい」

梨奈が目の前で手をパタパタさせる。

「おっと、いけない。先輩のバスケットをしている姿を思い出すと、トリップしちゃうんだよね」

「茜ちゃんは、ずっと御堂先輩のことが好きなんだ。告白したの？」

「そ、そんなこと出来ないよ」

何事にも積極的に取り組む茜が頭を振って取り乱す姿は、葵にとって珍しいものだった。よっぽど好きだということが感じられた。

「まあ葵ちゃんも十六なんだから、恋の一つや二つした方がいいんじゃない」

「恋は一回で良いよ」

葵は恋愛をするのなら一回で良いと思っていた。最初の人と結婚まで行くことを理想としている。それは以前、母親がそうだったと聞いたからだった。

「一回？その男が悪い奴だったら、どうするの？」

「そんな人は好きにならないから、大丈夫」

芸能活動をしていたときに色々なタイプの男を見てきた梨奈には、その考えは理解できなかった。葵のような純粋なタイプは、騙される可能性も高いと思ったが、口にすることはなかった。

「あつ、噂をすれば影だね」

茜がコソツと言った。

開きっぱなしの教室のドアを健吾が横切っていった。教室にある壁掛けの味気ない時計は、十二時五十五分を差していた。

「どんな仕事しているのかな」

単純に疑問に思った葵は、梨奈の顔を見た。

「え？そうねえ。ドラマのちよい役とかじゃない？」

「ちよい役って。画面の後ろにいる人達のこと？」

「そうそう。最初から良い役なんて、大きな事務所にでも入っていない限りまわってこないから」

「梨奈にも、そんな時代あった？」

一般人の葵と茜には未知の世界だが、茜はちよっただけ芸能界に興味があった。

「私はないよ」

メロンパンをかじりつて、即答した。

「だって私は」

「はいはい。そうでした。そういえばさ、葵は再来週の体育祭で何に出るの？」

また自慢話を聞かされると感じた茜は、早々に話を切り替えた。

「茜の、いけず」

梨奈は、いじけながらパンを噛みしめた。

「そういう茜ちゃんは？」

「私はフットサルに出るつもりだよ」

ここの学園長がたいそうなスポーツ好きで、自分の学校からオリンピック選手やプロ選手を輩出するんだと意気込み、立派な施設をたくさん造った。だからスポーツで優秀な生徒も多く、体育祭は大々

的に行われる。三つある体育館と屋内プール、野球場にサッカー場、テニスコートで多くの競技が同時進行する。

「私は運動が苦手だから、みんなの迷惑にならない種目にしようかなって」

「運動が苦手って、水泳は？得意でしょ」

「へえ、泳ぐのは上手いんだ」

体育で一緒の梨奈は、授業で失敗する葵の姿を見ているので意外そうに言った。この間のフットサルでは、空振りをするは、お尻に当てられるはと散々だったのだ。

「泳ぐのは好きだけど」

「出ないの？水泳部の女子以外だったら、ぶつちぎりでしょう」

葵のことを、みんなにもっと知ってもらいたいと願っている茜は、どうしても出てもらいたかった。

「そんなに速いんだ」

梨奈は葵の腕を取って、二の腕をさすったりプヨプヨと摘んだりした。

「くすぐりたいよ」

「どうして出ないの？」

「えっと。うんと」

「なあに」

歯切れの悪い葵に、しびれを切らした茜が顔をグツと近づけた。

「え」と。水着が……」

「水着？」

「この間、体重を量ったら太っていて、水着になるのがイヤだなあって。スクール水着じゃないから、新しい水着を買わないといけないし」

学校の方針で、地味なスクール水着は禁止となっている。派手すぎなければ何でも良いというのだが、目立ちたがりならともかく葵にとっては恥ずかしいことではなかった。

「太った？いったい、どこがよ」

顔がポツチャリしているので太っているように見えるが、実はプロポーション抜群なのは、妹の茜がよく知っている。小学校までは一緒にお風呂に入っていたから、身体の隅々まで知り尽くしていた。茜もスポーツ万能少女なので太ってはいないが、筋肉質なので女儿しい葵を羨ましく思っていた。

「よく分らないけど。お腹がなつて、なになに」

茜が予告なしに手を伸ばして、葵のお腹を触った。

「うーん。よく分らないな。よしっ、今日は一緒にお風呂に入ろうか」

「えー、イヤだよ」

一緒に入るのは嬉しいが、お腹を確認されるのは嫌だった。

「ダメ。一緒に入るんだから、私が部活から帰るまで入らないこと」
「……わかったわよ。どうせ夕飯の後片づけが終わらないと入らないし」

押しに弱い葵は渋々、了承した。

平日の夕飯は毎日、葵が作っているのですが、後片づけまで終わってからでないと風呂に入る気分にはなれなかった。特に今日は、鶏の唐揚げを作ろうと思っていたから尚更だ。シャンプーをした後に揚げ物なんてしたくはなかった。

そんな二人の会話を見ていた梨奈は、本当に仲の良い姉妹だなと羨ましく思っていた。

放課後、葵はいつもの商店街に向かった。屋根が掛かったアーケード街を歩いていると、どこかの学校の運動部がランニングしていた。

葵は、家事があるため部活には入っていない。だからといって親を恨んではない。双子の妹の茜がバスケット部で活躍しているのを心底、応援しているし、まるで自分が活躍しているような錯覚さえ覚えたことがある。去年の、全国中学校バスケット大会でベストファイブに選ばれたときは、自分がそうなること以上に嬉しかった。

ランニングの集団とすれ違い、その掛け声を後ろに聞きながら歩くと、行きつけの精肉店が見えてきた。

「いよっ、葵ちゃん。今日も可愛いね」

ショーケースの向こう側から、四十代半ばの店長が顔を出した。

「ふふ。ありがとうございます。今日もまけてくださいね」

「おうっ。今日はなんだい？」

「今日は、鶏肉を六百グラムくださいな」

「毎度あり。じゃあ、ちよっとおまけしちゃう」

更に五十グラムを足して包んでもらうと、葵は満面の笑顔で会計をした。店長の後ろには奥さんが立っていて笑顔を見せているが、内心は穏やかではなかった。

葵は、次の八百屋でもキャベツを十円安くしてもらった。小学校五年生の頃から毎日のように通っている商店街なので、今ではアイドル的な存在となっている。

「ん？何だろう」

買い物が終わリアーケードを抜けようとしたとき、視線の先に人垣があるのを見つけた。後ろから女子中学生が三人、四人と走って追いついていく。

通り道なので避けることなく近づいていくと、そこは美味しいと評判の定食屋の前だった。人垣の隙間を見つけて中を覗いてみると、どうやらドラマの撮影をしているらしかった。スポットライトが何本か見え、高そうなカメラを構えている人もいた。

あまりテレビを見ない葵でさえ知っている俳優が、監督から演技指導を受けているのが見えた。

ここに集まっている女子中学生のお目当ては、あの主演俳優なのだろう。

特に興味がなかったので帰ろうとすると、店内の端の方に見覚えのある顔があった。

「あれは……遊馬君？」

梨奈の言葉が甦る。

「え？そうねえ。ドラマのちょい役とかじゃない？」

少し興味を持った葵は、立ち止まって見ていくことにした。

「シーン57。定食屋での会話。よいい、スタート」

スタッフが野次馬を黙らせると、助監督がカチンコを鳴らして素早く引っ込んだ。

健吾はカメラに映るか映らないかの位置にあるテーブル席に、友人役らしき男と何かを喋っているが、その声をマイクが拾っているわけはない。店が賑わっているのを見せるための、いわゆるガヤというやつだ。

梨奈が言っていた、ちょい役どころか台詞もない。葵は他の野次馬と違って、ジッと健吾のことだけを見ていた。

何を話しているのかな？今夜の夕食のことかな。

などと思当違いのことを考えていると、主演二人の長台詞のやり取りが続いていた撮影が、女優の台詞が詰まったことで止まった。

「カット。もう一回」

台詞を忘れたらしく、監督の声が店内に響き渡った。ちょっとピリピリとした雰囲気の中、女優が化粧直しをしながら台本に目を通す。

その時、座ったまま待っていた健吾が突然、立ち上がった。

「そこ。立つな。黙っている」

「は、はい。すみません」

監督に怒鳴られて座り直すと、健吾は下を向いた。

「よいい。スタート」

テイクツーが始まると、今度は順調に進んだ。

「OK。じゃあ、次のカットの準備だ」

スタッフが忙しく動き始めたところで、葵は帰ることにした。いつまでも見ているわけにはいかないからだ。

「寄り道しちゃった。早く帰って支度しないと」

あと一歩でアーケードを抜けようとしたとき、買い物袋を持っていた左腕を取られた。

「おいっ」

「きゃあ」

身体が百八十度回転した。

「な、なに？あつ、遊馬君」

暴漢にでも腕を取られたかと思ったので、葵は目を丸くしていた。

「お前、今朝会った女だよな」

「そうだけど」

「さっき見たこと、誰にも喋るなよ」

「さっき見たことって？」

「撮影現場に俺がいたことだよ」

「どうして？お仕事でしょ」

「いいから喋るな」

訳が分からないという表情の葵に言い聞かせていると、撮影現場から顔を出したスタッフが大声で叫んだ。

「おい。その。早く戻れ。代わりなんていくらでもいるんだぞ」

「いま行きます」

振り返って答えた健吾は、

「お前。明日、昼休みに体育館の裏に来い。いいな」

そう言い残すと、葵の手を離して走った。

「必ず来いよ」

店の中に入っていく健吾を見送った葵は、首を傾げると何事もなかったように回れ右をした。

二　告白

翌日の昼休み、葵は言われるがまま体育館の裏までやって来た。こんな人影がない所に、例え呼び出されたからといって本当に一人で来るとは、葵は疑うということを知らなかった。

「遅いぞ」

声の主は、もちろん健吾だ。腕組みをして、仁王立ちをしていた。

「昼休みになって、何分経ったと思っているんだ」

「え？えくと、三十分かなあ」

「三十二分だ」

駆け出しとはいえ、芸能人の健吾は時間にうるさかった。

「何で遅れたんだ」

「だって、お弁当を食べていたから」

「弁当？こつちが先だろう」

「そんなこと言われても」

特に、昼休みに入ったらすぐになどと言わなかったのだから、その理不尽な言葉に葵は嫌悪感を抱いた。

「まあ良い。ところで、昨日の撮影のこと、誰にも喋ってないだろうな」

「喋ってないです」

「本当か？」

「本当です」

健吾は葵の目を、しばらく見つめた。

芸能人だけあって、その目には力がこもっていた。やましいことがあれば、思わず目を逸らしたかもしれないが、

喋っていない葵は口を真一文字にして耐えた。

「嘘じゃないみたいだな」

「あんな風に言われたからには喋らないよ。でも、理由くらいは教えて欲しいな」

「理由？そんなこと話す必要ない」

「じゃあ、喋っちゃうかも」

葵は見かけによらず強気に出て、健吾の一方的な言いように反抗した。

「可愛い顔をして、言ってくれるじゃないか」

また鋭い目を向けるが、葵は一步も引かなかった。

「くそつ。分かったよ。お前、名前は？」

健吾はコンクリートの床に座りながら聞いた。

「水瀬葵」

「水瀬か。俺は遊馬健吾だ。もう知っているか」

葵は隣に腰を下ろして頷くと、続きを促した。

「なんて言えばいいのか。ようするに、あんな仕事をしていることを学校の奴に知られたくないんだ」

「どうして？」

「どうしてつて。ガヤだぜ。あんなの……。クラスメートの奴らは、友達だけどライバルでもあるんだ」

ガヤなんていう仕事をしている自分が恥ずかしくなった健吾は、

葵から顔を背けた。

「どうして？立派なお仕事じゃない」

「立派？どこがだよ。あんなの誰でも良いんだよ」

デビューしてからというものの台詞のある役を貰ったことがない健吾は、自分に腹が立ってそう言い放った。

「あつ、ごめん」

明らかに恐がっている葵の表情を見て、気まづくなる。

「確かに、あの役はそうかもしれない。でも、目標に向かうための大切な仕事でもあると、私は思うよ」

「目標……」

「なにかある？」

「まずはドラマの主演だな」

「そう。じゃあ、ガヤでも真剣にやれば、監督さんの目に留まるか

も知れないんだよ」

まるでマネージャーのように言う葵に、健吾は自然に笑みが出た。
「ふっ。マネージャーと同じことを言うんだな。素人にまで言われるとは思わなかった」

「私だって、一応、プロの遊馬君に、こんなこと言うなんて思わなかったよ」

「一応は余計だ」

葵の頭に手をやり、小突くまねをする。

「きゃ。もうっ」

「ははははは」

健吾の心は、見上げた青空のように晴れやかだった。その顔を見て、初めは素っ気ないと思っていた健吾の印象が変わっていた。

「ホント、冷たい人じゃなかった」

「誰がそんなことを」

「梨奈ちゃんだよ。知ってる？D組の雲雀さん」

「雲雀か。もちろん知っているよ。有名だからな」

アイドルとして成功していたのに、それを捨てた梨奈とは、いつか話をしてみたいと思っていた。

「ところで、水瀬。なんで昨日、あんな時間にあんなところにいたんだよ」

健吾は、女子高生が放課後に商店街をウロチョロしていたのが気になっていた。ちよっと寂れた商店街に、まさか知っている奴がいるとは思わなかったからだ。

「何でって、夕飯の買い物してたの」

「買い物？そういうえば、袋を持っていたな。まさか、お前が作っているのか？」

「うん。家は両親が共働きだから。平日は私が作るの。家事なら何でもやるよ」

「へえ」

料理なんてまったく出来ない健吾は、それだけでも感心していた。

「さつき食べたっていう弁当もか？」

「お弁当は、お母さんの手作り」

「そっか」

健吾が残念そうに呟いたので、不思議に思い聞き返した。

「なんで？」

「いや、俺のも作ってもらおうかなって」

「え？何で私が、あなたのお弁当を作らないといけないの？」

「夜に仕事があると、ロケ弁ばかりで栄養が偏っているからさ」

「理由になってないよ」

「じゃあ俺達、付き合おうぜ。それなら、彼氏に弁当を作るのは自然な流れだ」

「え？」

一瞬、思考が停止した葵は、目を瞬かせた。そして次の瞬間、顔が紅潮してきた。

「な、何を言っているか、分かんない」

葵は恥ずかしくて、この場を早く離れようと立ち上がった。

「待てよ」

葵の腕を引っ張り反転させると、胸の中に引き入れた。

「本気なんだ。今まで何回か告白されたけど、自分から告白するのは初めてなんだ。どうやら一目惚れみたいだ。俺のこと、嫌いかな？」

「嫌いも何も、よく知らないよ」

「じゃあ、これから教えてやるよ」

強気な言葉で落とそうとしているからプレイボーイなのかと思いきや、健吾の心臓の高鳴りが葵の耳に響いていた。

それだけ緊張しているのが分かる。

「嘘じゃないの？」

「え？」

「一目惚れって」

「ああ」

恋愛には慎重な葵も、健吾の押しの強さに傾きつつあった。健吾

の胸の中にと、何だか安心できた。

身体中が浮いたようにフワフワした感覚に陥っていた。

「ホント葵は、男に縁がないから」

どうしようか迷っていると、先日、茜の言葉が思い出された。

茜ちゃんは、付き合ってみなさいって意味を込めて言ったんだよね。

健吾を受け入れる方へ、心の天秤が傾いていたとき、トドメの一言が囁かれた。

「好きだ。付き合ってくれないか」

その優しさが込められた言葉に、葵は落ちてしまった。

「うん」

「ホントか？」

「うん。よろしくね」

「やった」

あまりの嬉しさに、力一杯抱きしめて喜ぶ。

「く、苦しいよ」

「ごめん。嬉しくて、つい」

その言葉を物語っている歓喜の表情に、葵もつられて微笑んだ。

茜ちゃん、きつと驚くよね。喜んでくれるかな。

この時、まさか口論になるとは、夢にも思っていなかった。

放課後、部活が始まる前。

葵が交際宣言をすると、梨奈は喜んでくれたが、茜は何も言わなかった。

「なに黙っているのよ、茜。ついに葵ちゃんにも春が来たんだよ」

明らかに不満顔の茜と違い、梨奈は付き合ってみることを歓迎していた。

「恋愛は一回きりって昨日、言っていたけど、男ってどういう生き物なのか理解するためにも賛成だな。良かったね、葵ちゃん」

「ありがとう」

「どうしたのよ、茜。何か言ったら？」

まだ何も言わない茜の態度に違和感を覚えた梨奈は、恐がっている葵を気にしながら聞いた。

「葵なんて、男に騙されて終わるだけよ」

やっと口を開いたかと思えば、とんでも無いことを口にした。きつと喜んでくれると思っていた葵の顔から笑みが消える。

梨奈は、その場を去ろうとした茜の腕を取って謝るように促した。

「お姉さんに向かって、何てこというのよ」

「ふん」

茜は振り返りもせず、その手を振りきると走って行ってしまった。

「茜。待ちなさい」

梨奈は追いかけようとしたが、沈んだ顔をしている葵を置いていくことをためらった。

「きつと何かあるのよ。本心のわけないって」

葵は何も言わず、気まずい雰囲気 flowed。茜は、きつと喜んでくれると思っていたので、あんな反応を示したことにショックを受けていた。

「帰る」

しばらく黙っていた葵は、急に立ち上がって教室を出た。

「え？一人で大丈夫？」

「買物しないと」

「そう」

かなり心配だったが、今は茜の方が先と判断した梨奈は、葵を一人で帰して体育館に向かった。

体育館に行くと部活は既に始まっていて、とても茜を呼び出すという雰囲気ではなかった。仕方がないので、終わるまで図書室で待つことにした。

図書室には梨奈の他に、本を探しているらしい生徒が一人と、受付の図書委員が一人いるだけだった。

「早く終わらないかな」

窓側の席で時間が過ぎるのを待っていた梨奈は、体育館を見下ろしていた。

梨奈が芸能界を引退したのは高校に進学するためだったから、遅れた分を取り返すため必死に勉強したが、図書室でなんか勉強していたら邪魔が入るので家庭教師に来てもらった。

だから、こんな時間に学校の図書室にいるなんて、初めてのことだった。

梨奈が水瀬姉妹のことを気に掛けるのには理由がある。

中学時代から週刊誌の記者に追い回された梨奈は、周りに気を遣い、一人でいる時間が多くなった。何をするにも一人で、それで良いと思っていた時期もあった。

しかし、その一方で本当は違うというのも分かっていた。だから、高校に入ったら友達を作ろうと決意していたのに、早くも入学式に、どこかの記者に捕まってしまった。

また孤独な生活が始まるのかと落ち込んでいたら、急に記者の身体が横に飛んだ。訳が分からずキョトンとしてみると、目の前に茜が立っていた。腕を掴まれていたので暴行かと思い、どうしようかと悩んだ末に体当たりしたのだと聞いて、お腹を抱えたことが、最初の出会いだった。

それからというもの茜は特別な存在だったし、妙に気があった。

茜が運動部でなかったら、もっと一緒にいられるのに、と思うほどだった。

だから、仲良し姉妹の二人が羨ましかったし、さつきみたいなのとは早く解決させたかった。

「まだかな」

溜息混じりにその言葉を何回言っただろうか。

「あれ？この娘見たことある」

雑誌コーナーから適当に持ってきていたカメラ雑誌をめくっていると、グラビアアイドルとして載っている女の子に知っている顔があ

った。

「ふうん。まだやってるんだ」

梨奈が引退しようか迷っていたときに、同じように辞めたいと言って相談してきた人だった。いわゆる売れないアイドルの、一つ歳上の女性だった。その時は自分のことで精一杯だったので曖昧に答えたのだが、自分は引退したのに対して続けていたようだ。

カメラマンに向かって放っている満面の笑みの裏側は今、どういった心境なのだろう。

「ん」

腕を上げて伸びをすると、一人の生徒が視界に入った。

その女の子は、受付に座っていた図書委員だった。胸の名札を見ると、「一年F組遠矢美羽」とあった。

背高いな、この娘。

ゆうに百七十センチを越す身長は、どう見ても体育系少女だ。

自分と同じように体育館の方をジッと見つめて何回か溜息を吐いているので、不思議に思った梨奈はふと話し掛けてみた。

「なんで溜息吐いているの？」

「別に」

愛想が良いとか悪いとかではなく、何となく心を閉ざしているように感じたが、特に追求することはしなかった。

受付に戻ろうとした美羽の後ろ姿を追っていると、立ち止まって一言だけ言った。

「ここ、五時までだから」

「え？早く言つてよ」

図書室の閉館時間など知らなかった梨奈は、五時を回っている時計を見て立ち上がった。本を探していた生徒は、いつの間にかいなくなっていた。梨奈は急いで雑誌を戻すと、鞆を持って図書室を出た。

「どこにしようかな。よしっ、あそこにしよう」

吹奏楽部の演奏が聞こえる廊下を、梨奈が向かった先は保健室だ

った。

「先生。お腹が痛いので休ませてください」

戸を開けると、保健室特有の消毒液の臭いがした。

「嘘を言わないの。帰宅部なんだから、早く帰ったら？」

先客、といっても梨奈と違って怪我をしたらしい生徒を治療中の先生に即答された。

「はは。まあ、今日は事情がありまして……って、茜？」

誰を治療中かと思ったら、それは茜だった。ユニフォーム姿のまま、先生と対面に座って左手を出していた。氷嚢で指をアイシングしているの、突き指なのはすぐに分かった。

「大丈夫？」

駆け寄って尋ねたが茜は何も答えず、先生が代わりに答えた。

「軽いようだから、こうしていれば大丈夫よ。今日は安静にした方がいいから、部活はここまでにして帰りなさい」

「分かりました」

先生が湿布を貼って包帯を巻いている間、黙ってみていた梨奈は、処置が終わると同時に茜に話し掛けた。

「ねえ、茜。さっきの……って、ちよつと」

茜は誰もいないかのように、梨奈を無視して保健室を出ていった。

「ちよつと、茜」

「雲雀さん」

後を追おうとした梨奈を、先生が呼び止めた。

「お姉さんと何かあったんでしょ。後悔していたみたいだから、話を聞いてあげて」

「はい。ありがとうございます」

着替えてから来るだろうと思い昇降口で待っていると、数分後に出てきた。しかし、梨奈の呼び掛けを無視して通り過ぎていく。

「待ってよ」

スタスタと早足で歩く茜の後ろを、追いかけていく。

「騙されるなんて。そんなことないよ。友達に聞いたら、遊馬は真

面目な奴だつて言つてたから。ねえ。何か言いなさいよ」

梨奈が何を言つても言い返すことなく、茜はただ黙々と歩き続けた。

もうすぐ、二人の帰り道が分かれようとしたとき、ポツリと言つた。

「まだ早いよ」

「え？」

「男と付き合うなんて、まだ早いって言っているの!!」

茜は真剣な顔で、吐き捨てるように言つた。

「だって、葵ちゃんが男に縁がないって言っていたじゃない。それ
つて男に興味を持てつてことでしょ？」

「そうだけど、違うの」

「どういうこと？矛盾してるよ」

「矛盾なんかしてないよ。まだ付き合うのは早いって言ってるの。
葵のことは、私を守るんだつて、決めてるんだから」

茜は、仕舞つたという顔で口に手を当てた。

「守る？どういうこと？」

「梨奈には関係ないでしょ」

「あるから言ってるの」

歩く速度を上げた茜に、追いつきながら言つた。

「言いなさいよ」

「……小さい頃、キャンプに行つて、私が川で溺れちゃつて、葵に
助けてもらつたときに決めたの。私を守るんだつて」

「ああ。そう言うこと」

茜は、大好きな姉を取られて悔しかったのだ。納得した梨奈は、
ホツと胸を撫で下ろした。

「そんなことがあつたんだ。お姉さん思いなんだね。じゃあ、そう
言えば良かったじゃない。騙されるとか言つて」

「そんなこと言える訳ないでしょ。展開が急だったし」

「遊馬は悪い奴じゃないつて。もし、葵ちゃんが悲しい思いをした
ら、遊馬をとつちめればいいよ。あんなこと言つて、後悔してるん

でしょ」

否定しないと言うことは、後悔しているということだ。何も言わないので、話を逸らしてみた。

「あっ、もしかして茜って、溺れたのがトラウマになって泳げないとか？わっ！！」

茜が急に立ち止まったので、背中に衝突してしまった。

「そつよ。悪い？」

「全然。運動に関しては完璧少女だと思っていたから、逆に可愛いよ」

そつ言って背中から抱きついた梨奈は、茜の頭を撫でた。

「何よ、馬鹿にして」

「どう？葵ちゃんに謝れる？」

「分かったよ。言い過ぎたのはちゃんと謝るし、今は見守ることにする。ただし、葵を泣かせたら、ただじゃ置かないから」

「うん。私からも釘を差しておくよ」

梨奈は、とりあえず安心した。

「よし、明日からあの男を、よく観察しないと。どんな男かちゃんと把握しておく必要があるし」

「なに言ってるの茜。クラスが違うじゃない」

「そうだけど、噂とかあるじゃない。梨奈も協力してよね」

茜は抱きついていて梨奈の腕をほどいて振り返った。

「え」と

答えに困っている梨奈にグッと迫って肩を掴むと、激しく揺さぶった。

「し・て・よ・ね！！」

「は、はい」

迫力に負けてしまった梨奈は、後ずさりをしながら答えた。

「葵に相応しくないときは、徹底的に邪魔するんだから」

どちらに転ぶか分からないが、葵の初めての恋がスタートした。

三　くそれぞれの思惑く

喧嘩をしたから、茜の晩ご飯は抜き。なんて意地悪なことはしない。葵はいつもと同じように晩ご飯の材料を買って帰宅した。いつもと違うのは、メニューが茜の好きな物ばかりだということだ。

茜からあんな風に言われるなんて、今でも信じられないでいたが、理解を得られないまま健吾と付き合うことは出来なかった。

「騙されるだけ……か」

その言葉が気になり、上の空状態で調理していたら、両手を行き来していたハンバーグが、ぺしゃんこになってしまった。

「あわわ」

こんな感じで時間が掛かってしまい、気が付いたときには六時過ぎていた。

玄関の扉が開く音がして、茜の声が聞こえてきた。

「お、おかえり」

いつもより早い帰宅に戸惑いながら、玄関に向かって叫んだ。調理をする手を早めると、着替えた茜が降りてきたと同時に出来上がった。

「いつもより早かったね」

茜は問い掛けに答えずにソファに座り、テレビをつけた。

「出来たから、食べよう」

「……」

黙って食卓についたので、まだ怒っているのかと落ち込んでいると、手に巻かれている包帯にやっと気が付いた。

「どうしたの？」

驚いた葵は、駆け寄って手を取った。

「ちよつと突き指しただけ」

「大丈夫？痛い？」

自分のことのように心配している姉のを見て、茜は一息吐い

た。

「大丈夫だから、食べよう」

「う、うん。食べさせてあげようか？」

「左だから大丈夫よ！」

「あつ、そうだね。ごめんね」

茜の少し荒い言い方に、身体をこわばらせた。

「ほら、早く座って」

これ以上、怒らせたくなかった葵は急いで席に着いた。

「いただきます」

「い、いただきます」

食べ始めてしばらくの間は、二人とも何も話すことなく黙って食べ続けていた。いつもお喋りをしながら食べているので、テレビの音が大きく聞こえた。

葵は大好きなジャガイモを食べても、まったく味が分からなかった。どうすれば茜の機嫌が直るのか考えようとしても、

何も思い浮かばない頭の中は真っ白だった。

「なんか、私の好きな物ばかり」

「え？」

不意に話し掛けられて、イスから身体が浮き上がった。

「そ、そうだね。何でかな」

「しらばつくれなくてもいいよ」

「はい」

茜の冷静な声色に、目論見が見透かされているのが分かって俯いた。

夕飯が手に着かずシヨンボリしていると、意外な言葉が掛けられた。

「ごめん、姉さん」

「……何が？」

ちよつと顔を上げて、上目遣いに見る。

「私って、素直じゃなくて。さっきは酷いこと言って、ごめんなさい」

怒っていると思っていた茜に、頭を下げられて困惑する。なんと答えたらしいのか分からなかった。

「騙されるなんて言っちゃって、後悔してる。許してくれる?」

「許すもなにも、私は怒ってないから。てっきり、茜の方が怒っているんだって」

「私も怒ってはないよ。ただ……」

「ただ?」

「……だけ」

今度は茜が俯いて、ボソボソと小声で呟いた。

「え?何て言ったの?」

「悔しかっただけ!」

声は荒いが、上げた顔は真っ赤に染まっていた。

「……あつ」

その言葉の意味に気が付くまで、数秒を要した。先に彼氏が出来たことが悔しいのかとも思ったが、赤みが引かない妹を見ていて察した。

「そうだったの」

途端に葵の表情は、姉のそれになった。茜の後ろに立ち、そっと抱きしめる。

「ありがとう。何があったって、私は貴方のお姉ちゃんだから」

「うん。分かってる」

その微笑みと優しさが、他の男にも向けられるのはやっぱり悔しかったが、それも仕方のないことだった。

「あの男に苛められたら言うてよ。とっちめてやるから」

「うん。ありがとう」

「早く食べよう。冷めちゃう」

「そうだね」

茜は止まっていた手を忙しく動かした。

「ハンバーグ美味しいね。このチーズが良い味だしてる」

「ふふふ」

そんな照れている妹を見ていたら、自然に笑みが零れた。

「な、なによ」

「何でもないよ。ふふ」

「ふん」

葵は、そんな憎まれ口を叩く妹を、包み込むように見つめていた。

「一緒にお風呂に、入ろっか」

そんな葵の誘いに、茜は嬉しそうに頷いた。

妹の公認を得た葵は、晴れて健吾と付き合うことになった。親ではなく妹の公認というのも変だが、茜の存在はそのくらい大きかった。

お風呂から上がると、葵は自分の部屋でこれからのことを考えた。次の日からというもの、それまでの生活が嘘かと思えるほど、葵の心の中は健吾のことではいっぱいになるのだが、

「付き合うつて、何をするんだろう」

こんな言葉を口にするくらい、初めは何も想像出来なかった。

「ただいま」

下の方から、母親が帰ってくる声が聞こえた。

「そうそう。お弁当だ」

栄養が偏っているからお弁当を作って欲しいと言われたことを思い出した葵は早速、行動に移した。弁当のおかずは、

葵が晩ご飯のおかずと一緒に買ってきているから、作る物は決まっている。

「お母さん。お帰りなさーい」

叫びながら階段を駆け下りていき、居間でくつろいでいた母親の隣にドスンと座った。

「なあに。騒々しい」

「あのね。私、男の子とお付き合いすることになったの」

「ええっ!!」

残業で疲れて帰ってきて、ソファに沈み込もうとしていた上半身

が跳ね返った。

「嘘でしょ？」

「こんな嘘、つくわけないでしょ」

「ホントなの。どんな子？名前は？」

「え」と。遊馬健吾君といって、駆け出しのタレントさんだよ。性格は、まだよく分からないけど」

「そう」

タレントという所が少々、引つ掛かったが、葵が選んだ人なら大丈夫だろうと思い、何も言わなかった。

「それでね。お弁当を作って欲しいって言われたから、明日から作るんだけど、一人分作るなんて面倒だから、五人分全部、私が作る」

「そう。分かったわ。じゃあ、お言葉に甘えようかな」

「うん。ゆっくり寝ていていいからね。よしっ、もう寝ようっと」

葵が勢いよく立ち上がると、父親が帰ってきた。

「ただいま」

「お帰りなさい。お父さんにも報告しなきゃ」

言うが早いか廊下に出ていく。

「あつ、ちよっと待ちなさい」

止める声も虚しく、差し出した手を顔に当てた。

「お父さん、私、男の子と付き合うことになったの。だから、明日からのお弁当は私が作ってあげる」

「何？」

葵は、呆然とする父を残して階段を駆け上がった。その後ろ姿を見送った父は、ちよっと寂しそうな表情で居間に入った。

「男親の辛い所ね」

「そうだな」

顔を見合わせた夫婦は苦笑した。

翌日の昼休み、茜がいつものように弁当箱を持って葵の席に行くと、葵の鞆から弁当箱が二つ出てきた。

いつも起きるのが遅い葵が、今朝は自分より早く起きていたので何事かと案じていたのだが、フタの閉まった合計五個の弁当箱を見て、すぐに分かった。

「あの男の所に行くの？」

「うん」

あっさりと肯定された茜は一瞬、頭がクラツとしてよろめいた。

「だ、大丈夫？どうしたの？」

「まさか、お弁当の中身って同じなの？」

「当然じゃない。違うのを作るのなんて手間だもん」

認めたとはいえ、なんで姉と付き合っている男と同じ弁当を食べないといけないのかと思ったが、口に出すと悲しむだろうからやめた。

「じゃあ私は遊馬君と一緒に食べるから、茜ちゃんは一人で食べてね」

返事を聞くまでもなく、弁当箱を二つ持って教室を出ていく。取り残された茜は、その行動の早さに唖然とした。

「あはは。茜、一人？」

メロンパンを持った梨奈が背中から話し掛ける。健吾の教室の方へ走っていく葵を見たらしく、わざとらしく言う。

「何で、あいつと同じお弁当を食べないといけないわけ？」

それが姉を取られた気持ちから出た言葉だと分かっていた梨奈は、茜の頭を優しく撫でた。

「よしよし。私が一緒に食べてあげるから」

「うっ」

妹の思いなどいざ知らず、これから始まる恋愛というものに期待満々の葵は、意気揚々と芸能科の教室前まで来た。

「あれ？いないなあ」

廊下から遠目に中を覗いてみたが、健吾の姿は見えなかった。「すみません。遊馬君は……どこに」

仕方がないので、教室に入ろうとした男子に声を掛けると、興味津々に近づいてきた。

「遊馬？何々。君、健吾の彼女？」

「え？え」と

健吾が友達に自分のことを言っているのか分からなかったし、自分から「彼女です」なんてとても言えずに口籠もっていると、その男子は教室に向かって大声で叫んだ。

「みんな、健吾の彼女が来てるんだけど、あいつどこに行ったかわかるか？」

「えっ、あつ」

「健吾の彼女だって？どこどこ」

「あいつ彼女いたのかよ」

教室の中にいた全ての生徒の視線が葵に集中した。恥ずかしがり屋の葵は、その視線にとても堪えられず走って逃げようとしたら、廊下の向こうから健吾が歩いてきた。

「水瀬、どうした」

葵に気が付いた健吾が駆け寄ると、その胸の中に飛び込んだ。

「こいつらに苛められたのか？」

微かに震えている葵を気遣いながらクラスメートを睨んだ。

「ちよつと待て、何もしてないって。そんなに睨むなよ。この娘がお前を探していたから、みんなに聞いたただだって。なあ」

「そうそう」

他のクラスメートも口々に否定した。

「水瀬、ホントか？」

「う、うん。ごめんなさい。みんなが一斉にこっちを見たから恐くて……」

「そうか」

顔を上げた葵は、咄嗟とはいえ抱き付いていたことに気が付いてパツと離れた。頬を紅潮させて俯く。

「初々しくて可愛いねえ。健吾の彼女なんだろう？」

「そうだよ」

健吾が即答したので、葵はそれに反応して顔を上げた。するとクラスメート達が、手を合わせたりして驚かせたことを詫びたので微笑むと

今度は、

「驚かして、ごめんね」

「良い奴だから、仲良くしてやって」

「可愛いねえ」

謝罪の中に混じっている冷やかしの言葉に、また恥ずかしくなつて俯いた。

「なんか、お前に用があるらしいぜ。後で詳しく教えるよ」

健吾が来たことで役割を終えたクラスメートは、教室の中へ引込んだ。

「どうしたんだ？」

「う、うん。お弁当作ってきたの。一緒に食べようと思って」

「ホントか？」

よっぽど嬉しかったのか、弁当箱に向かって手を合わせた。

「大袈裟だよ」

照れ笑いをしつつ、健吾が持っていた物に気が付いた。今まで気が付かなかったそれは、購買から買ってきたパンと紙パックだった。

「遊馬君、それ」

「ん？ああ、これが。これは夜にでも食べるからいいよ。ちょっと待って、置いてくるから」

教室に入り鞆に突っ込むと、葵の手を取り中庭へ向かった。

この学校の中庭はけっこう整備されている。校舎に囲まれた中庭の中央には大きな噴水があり、その周りには様々な植物が植えられていた。

芝生も綺麗に刈り込んであり、二人は木立の下あるベンチに並んで座った。

「そんなに大した物はないんだけど、どうぞ」

「ありがとうございます。有り難くいただきます」

弁当箱の蓋を開けると、いかにも手作りといった感じのおかずが詰められていた。それだけでも嬉しいのに、栄養が偏っているという健吾の

言葉を重視した、おかずが更に喜ばせた。

「ん。美味しい」

「ホント？良かった」

次々と食べ進む健吾を見ると、今までにない感覚が葵を包んだ。

美味しいという言葉に対する嬉しい気持ちは、同じ男でも父親とは違う。隣に座っている男の子と自分は付き合っているんだということ

実感する。

「これってナスだよな」

「うん。麻婆茄子だよ。ヘルシーで美味しいんだよ」

健吾の箸を持つ手が一瞬止まったが、すぐに口に運んだ。

「どう？」

「うん。美味しい」

実はナスが嫌いなのだが、葵はそれに気が付かなかった。

「ご馳走様」

「お粗末様です」

お茶を飲んで一息吐いた健吾は、ジッと葵の顔を見た。

「俺達、付き合ってるんだよな」

そう改めて言われると恥ずかしい。葵は黙って頷いた。

「そうそう。さっきは、ごめんな。クラスの男どもめ」

「ううん。大丈夫だよ。それよりいいの？みんなの前で公言して」

「良いも何も、隠す必要ないから」

「そうなんだ」

芸能人といえば、恋愛ごとは隠すものだと思っていたので意外だ

った。自分のように、両親には言っているのだろうかという疑問も湧いた。

「昨日、お父さんに付き合っていること言っちゃったんだけど」

「水瀬のお父さんて厳しいのか？」

「んー、どうなんだろう。よく分かんない」

未だ反抗期が来ていない双子の姉妹だからなのか、特に厳しく何かを言われたことがない。門限を言い渡されたこともなければ、叱責されたこともないので、友達が父親をつるさがる気持ちも理解しがたいものがあつた。

「それは、親に愛されている証拠だよ」

「そうかな」

「そついえば今度の体育祭、何に出るんだ？俺は水泳に出るんだけど」

「あつ、私も同じだよ」

葵は水着を買いに行かないといけないことを思い出して憂鬱になった。

「そうなのか。……どんな水着だ」

「どんなって、普通のだよ」

葵は健吾の視線が下から上へ上がってくるのに気が付いて身をよじった。

「あつ、変なこと想像しちゃダメだよ」

「健全な男には無理ってもんだ」

「もうっ」

いくら奥手とはいえ、付き合うということはどついうことなのかは理解している。だが今は、水着を見られるというだけで恥ずかしいと思っていた。

四 く体育祭く

数日後の体育祭当日は、晴れどころか大雨となった。しかし延期にはならないのが、この学校の凄いところだ。さすがに屋外の競技は中止になったが、体育館で行う競技なら大丈夫。強豪運動部を有している夕風学園は、体育館を三つも持っている。急遽、出場種目を変更して

効率よく進行していった。

「あゝ、もう負けちゃったよ。ボールは手で扱う物なのに」

昼も近くなってきた頃、フットサルに出ていた茜が早々に引き上げてきた。葵のことが気になったので、プールへと続く廊下をジャージ姿で

歩いていると、第一体育館のドアの向こうから歓声が聞こえてきた。

「かなり盛り上がってるなあ」

確か、第一体育館ではバスケットが行われているのを思い出し、ふてくされ顔から一変、興味津々にドアを開けると大勢の観客の中で試合が

行われていた。スコアボードを見ると、一年D組と三年A組の試合だった。どうやら一年D組の方が勝っているようだ。何でこんなに盛り上がっているのか知りたくて目を凝らしてみると、三年生チームの中にバスケット部の先輩を見つけた。

本来、所属する部活には出てはいけなのだが、雨のため急遽、種目を変更したため一人だけなら許されていた。

「え？確か」

もう一度スコアボードを見た。

「一年の方が勝ってるよね」

とその時、一際大きな歓声が上がった。

「十五番、また止めるかな」

観客の声につられるように十五番の選手を探すと、その選手はゴ

ール下に陣取っていた。ポジションは、どうやらセンターらしい。次の瞬間、先輩がドリブルで切り込んで放ったシュートを完璧にブロックした。

「凄い」

その先輩はベンチに入る実力者のはず。バスケ部員をあんな風に封じるなんて、とても素人の出来ることじゃない。

「茜、茜。今の見た？」

そこに茜を見つけた梨奈が話し掛けてきた。

「うん。梨奈、ずっといたの？」

「いたいた。あの十五番の娘、ホント凄いだよ。あの人、バスケ部なんですよ。半分以上は止めてるよ」

「そんなに？」

その言葉は、かなりの衝撃だった。

「誰なの？何部なんだろう」

「そう言えば私、あの娘のこと知ってる。確か、図書委員だよ」

「図書委員？」

素っ頓狂な声を出す。

「うん。部活の時間に図書室で受け付けしていたから、そうだと思うけど」

その試合は結局、一年D組が勝った。

「ぜひスカウトに行かないと、名前覚えてる？」

「え」と、確か、遠矢美羽さん」

美羽がやっていたセンターのポジションは、長身の選手がつく守りの要のポジションだ。今年、全国から集まってきたバスケ部員の一年生には、そのポジションが不足していた。

茜が、善は急げとばかりに観客席の階段を降りていこうとすると、梨奈が腕を取った。

「茜、もうすぐ葵ちゃんの出番だよ」

「え？そうなの？」

「うん。この試合の前まで、プールにいたんだ」

平泳ぎに出場している葵は、順調に勝ち進んでいた。

「うっ。分かった。スカウトは後にする」

姉のことが心配な茜は、梨奈とともにプールへ急いだ。

一端外に出て目の前に見える室内プールは実に立派で、50メートルプールと飛び込み種目専用の可動床プールまである。

二人は中に入り、二階の観客席へ続く階段を駆け上がる。そしてドアを開けると、プール特有の塩素臭が鼻につき、顔に湿気がまとわりついて

きた。

「ここも盛り上がっているね」

隣の人の声も聞こえにくいほどの歓声の中、梨奈が茜の耳元で言った。

「ホント」

プールへ目をやると、平泳ぎが行われていた。葵が出ると言っていた種目だ。電光掲示板を見ると『平泳ぎー00M準決勝』とあり、五コースに葵の名前があった。今は三位に着けている。

「折り返したよ。凄い、葵ちゃん。ちよつとずつ差を詰めてるよ」

「うん。そこだ、いけ」

上から見ると四コースを先頭にして、くの字を形成していたのだが、五コースの葵が追いかけている。

「あっ」

順調に追い上げていた葵が突然、もがいたかと思ったら、水泡を残して沈んでしまった。

「葵――！」

一瞬、何が起こったのか分からなかった茜だったが、すぐに観客席の階段を駆け下りると、手すりに手を掛けた。下へ飛び降りようとした所を、梨奈が慌てて掴んだ。

「待つて。誰かが飛び込んだから」

「え？」

周りが騒然としている中プールを見ると、クロールで向かってい

る男がいた。沈んだ辺りで大きく息を吸うと、葵を助けるため潜っていた。

「まだなの？」

潜った後、茜にはほんの数秒が何分にも感じられた。

「出てきたよ」

咳き込む葵を抱えながら、男はゆっくりとプールの端までたどり着いた。

「遊馬君だったんだ」

梨奈の言うとおり、葵を救出した男とは健吾だった。葵の身体を下から抱え上げると、後は集まっていた救助係に任せる。担架に乗せられて

出ていくのを見送りながら自分もプールから出ると、健吾に向けて拍手が降りそそいだ。

「やるじゃない。どうしたの、茜」

手を叩きながら感心している梨奈の横で、茜は複雑な表情を浮かべていた。

「嫌な予感がする」

その予感は当たっていた。

大事にいたらなかった葵は助け出された後、保健室で休んだだけで帰宅できた。それは良かったのだが、茜は部活を終えて帰ってきてからずっと、惚気話を聞かされ続けるという被害を受けた。

居間でテレビを見ているときも、食事をしているときも、食器の後片づけを二人でしているときも、挙げ句の果てにはお風呂に入っている

ところから入ってきて延々と話し続ける始末。

「あまり覚えていないんだけど、頼もしかったな。こうね。遊馬君の胸に抱かれてね」

茜を健吾に見立てて、胸の中に頭を埋めた。

「いい加減にしてよ。もう聞き飽きた」

投げやりな相槌を打つだけで、ほとんど聞いていなかった茜だっ

だが、遂に堪忍袋の緒が切れた。肩まであつた水位が下がり、浴室を飛び出した。

「怒ってるの？」

「怒ってないよ」

その言葉とは裏腹に、吐き捨てるように答えてしまう。

「ごめんね」

小さな声で呟くのが聞こえた。

「怒ってないから。先、行くよ」

初めての恋愛に舞い上がっている気持ちも分からないでもないが、この恋愛に反対の茜にとっては気分の良いものではない。

「あいつが告白なんてするから悪いんだ」

告白を受け入れた葵ではなく、切り出した健吾に怒りの矛先が向けられることで姉妹喧嘩は回避したが、もう一つ気になることがあった。

「たぶん大丈夫」

しかし、その願いは、翌日登校するとすぐに破れた。

校内にいくつかある掲示板の全てに貼られた新聞部発行の校内新聞に、昨日の救出時の写真が大きく載ったのだ。

「何なの、これは」

茜は掲示板に集まっている生徒達をかき分けて、それをバシバシと叩いた。

「私ってば、こんな顔してたんだ。恥ずかしい」

後ろから遅れてきた葵が、脳天気写真の感想を言う。溺れた直後なのだから、まともな表情のわけがない。そんなこと観衆が気にするはずもないのだが、当の本人には重要な問題らしい。

「いたいた。いま来たの？大変だよ、茜」

「梨奈。大変って何？」

早くに来ていた梨奈が、茜の耳元に囁く。

「え？本当？」

二つ目の予感が当たってしまった。噂が広まるのはアツと言つま

で、この写真を切っ掛けにして、すでに葵と健吾が付き合っていることが

全校に広まっているという。

「新聞部め。梨奈、新聞部の部室はどこ？」

「文化部棟だから、あっちだけど。あつ」

聞くが早いか、茜は全速力で新聞部の部室へダッシュしていた。

「誰もいないと思うんだけど……」

すでに見えなくなった茜に向かって、梨奈の言葉が虚しく消える。

「茜ちゃん、どこに行ったの？」

「ん？葵ちゃんは気にしなくて良いと思うよ」

「ふうん」

自分のことなのに、まったく気が付かない葵だった。

「ここね」

文化部の部室が並んでいる棟の一室、新聞部のプレートが張つてあるドアに手を掛けた。豪快に開けて驚かそうと力を入れたが、ガタガタと動くだけで開けなかった。それもそのはず、放課後にならないと誰もこないからだ。

「誰もいないの？」

ドアを壊さんばかりに何度もノックする。今週号として、すぐ横に貼つてあつた同じ新聞を見て、また怒りが込み上げてきた。

「ん？」

写真の下に小さく載っている、カメラマンの名前が目に入った。

「鳴海匠？」

その名前には見覚えがあつた。同じクラスの鳴海匠だ。あまり目立たないタイプの生徒で、今まで特に会話をしたことがない。

「あいつは確か、写真部だったはず」

誰からだったか、中学校からここに通っているクラスメートから聞いたことがある。鳴海はいわゆるハイアマチュアカメラマンで、カメラ雑誌やコンテストで何度も入賞したことがある。専門は風景だが、その腕を見込んで写真を撮って欲しいという女子が結構いる

とも

聞いた。

教室に駆け込んできた茜は、鳴海の席を睨んだ。

「いた」

大股開きで近づいていって、目の前で顔を指差し文句を言おうとした瞬間にチャイムが鳴った。

「ちよつと鳴海君！！」

「なに？」

「校内新聞に載った写真のことだけど」

茜は机を強く叩いてまくし立てた。

「ああ。あの写真か。あれがどうかしたのか。おつ、話は後だ」

匠は担任が入ってきたので、茜の肩を掴んでどけた。

「ちよつと」

「水瀬。早く席に着け。昨日までの体育祭気分が抜けていないのか？早く切り替えるよ。じゃあ、出席とるぞ」

茜は担任を横目でチラリと見ると渋々、自分の席へ着いた。

二時限目が終わった後、茜はやっと匠を捕まえた。目を真っ直ぐに見据えて、強気で迫る。

「何で、あんな写真を載せたのよ」

「俺は新聞部じゃないよ。たまたま写真部の仕事でプールにいた俺に、あのシーンの写真がないかって新聞部の奴に聞かれたから、

あれを出しただけだ」

「出さなきゃ良かったんだから、同じことでしょ」

「断る理由がない。前もって、お前に言われたわけじゃないからな」

「そ、それは。で、でも、姉さんに許可なく載せたでしょ」

「それは新聞部の役目だ」

「うっ」

明らかに言い掛かりをつけている茜の方が、分が悪い。

「何か不都合でもあったのか？」

「そ、それは、姉さんと遊馬君が付き合っているっていう噂が広ま

「っちゃって」

「それって嘘なのか？」

「……本当」

正当なことを言われて、初めの勢いが無くなってしまった。

「じゃあ、俺はまったく悪くないだろ」

「……そうね」

視線を外して、力なく呟く。

「じゃあ俺は行くぞ。次は物理だからな」

「く、悔しい」。何、あの態度は」

次は移動教室のため、さっさと教室を出ていく匠の背中を見て地面を踏んだ。

五　フアインダー越しに見えるもの

「あんなに大きく出るなんてな」

茜を残して出てきた匠は廊下を歩きながら、今朝見た写真を思い出した。さつき茜に言ったとおり、何も悪いことはしていないのだが、後味の悪いものになった。風景写真以外には、あまり興味が無い匠にとって、昨日撮影したあの写真は何でも無い只の記録写真だった。

それがクラスでも目立っている茜に、あんな風に詰め寄られるなんて思いもしなかった。

どうやら妹は、この恋愛を快く思っていないことが窺い知れた。

「悪いことしたかな。あとで二人に謝りに行くか」

茜に謝る筋合いはないが、当事者の二人には謝った方がいいかなと考えていた。

匠が四時間目の体育を終えて教室に戻ってくると、葵はすでにどこかに出てしまった後だった。

「水瀬、姉さんは」

さつきのやり取りがあったから、ぶつきらばうに尋ねた。

「葵？彼氏とお弁当だよ」

「そうか。どこに行ったかは……分らないんだな」

茜の表情が一変したので急いで教室を出ると、当てもなく探し始めた。本当は購買にパンを買いに行きたかったのだが、早くこの件を片づけておきたかった。

「いったい、どこに行ったんだよ」

けっこう歩いたが見つからない。窓の外を見ると、匠の心のモヤモヤとは正反対の快晴だった。こんな日は、屋上でパンを食べたかったと悔やんだ。

「そうか、屋上か」

屋上へ続く重いドアを開けると、陽の光が射し込んできた。

目をパチパチさせて慣れさせると、周りを見渡して二人を探した。すると、ベンチの一角に座って食べているのを見つけた。

「健吾。ちょっと、いいか」

「どうしたんだ、匠」

下の名前で呼び合う二人は、実は面識があった。匠は昨年の冬からたまに、アルバイトでプロのカメラマンの手伝いをしている。手伝いといっても撮影をさせてもらえるわけではなく、雑用ばかりなのだが、現場にいるというだけでも勉強になることは山ほどある。

その現場に先月、健吾が仕事で撮影に来たのが切っ掛けで話すようになった。

「あの噂になっっている校内新聞の写真な、俺が撮影したのを新聞部に提供したんだ」

「あつ、そうだったのか」

「迷惑掛けてすまない」

「迷惑って？」

健吾と葵は顔を見合わせて、まばたきした。

「水瀬、何か迷惑だったか？」

「ううん。遊馬君は？」

「何にも。むしろ公認の仲になって良かったよ。俺のファンは、ちょっと嫉妬しただろうけど」

いるかも分からないファンのことを気に掛けて笑う健吾と、つられて微笑んでいる葵を見ると、どうやら怒ってはいないらしい。

「じゃあ、大丈夫なんだな」

「大丈夫も何も、感謝してるくらいだよ」

健吾のことを密かに慕っていた女生徒は事実いた。しかし、昨日の救出劇は一種の美談としての要素が含まれていた。校内新聞の記事の中でも、これによって恋愛が始まるかも知れないという内容だったため、反対や嫉妬を抑制する効果を生んでいたのだ。

「そうか。良かった。邪魔したな」

弁当の途中だったことを思い出して、匠は急いでその場を離れた。健吾と葵のことは所詮、他人の恋愛ごと。匠は普段の生活に戻った。

あの写真が掲載されてから二ヶ月以上が経ち、もうすぐ夏休みになろうとしていた。

学校生活は、可もなく不可もなく。勉強よりも部活の方が楽しいし、更に言えば部活よりも助手のアルバイトの方が楽しかった。

七月に入って初めての日曜日の今日は、グラビア撮影の助手をしてくれという電話が急に入った。匠はジリジリと肌を刺す紫外線と、アスファルトからはね返ってくる熱気にグツタリとなりそんな身体にむち打って自転車走らせた。

「涼しそうだな」

信号で止まると、横にあったカフェの店内が目に入った。

冷房が効いているのを恨めしそうに見ていると、知っている顔があった。健吾と葵の二人だった。

「おっと」

青に変わったので、すぐに発進する。

「まだ、付き合ってたんだな」

そこに特別な感情などなかった。

それから十分も走ると、やっとスタジオに到着した。自転車を事務所がある雑居ビルの横に置くと、端にある狭い階段を駆け上がった。

ドアを開けると、すぐスタジオになっている。そこには撮影を待っているグラビアタレントが六人程待っていた。こういう所に来る女の子は当然可愛くて、初めの頃はちよつと照れたが、最近はもう見慣れたものだった。

「おはようございます」

ほぼ一斉に頭を下げたが、顔を上げると落胆の表情を見せた。偉い人が入ってきたと思ったのだらう、入ってきたのがどう見ても学

生だと分かった、すぐに散り散りになった。何回も同じことを経験している、匠はまったく気にすることなく奥にある事務室に向かった。ドアを開けようとしたとき、

「よろしく願います」

シヨートカットの娘が、もう一度頭を下げた。その目は強く、やる気に満ちていた。

匠は、軽く頭を下げてただけで事務室に入った。

「こんにちは」

「おう。来たか」

お世話になっっている売れっ子のカメラマンと、二人のアシスタントが迎えてくれた。

「熊谷さん。今日は多いですね」

プロカメラマンの熊谷は、アイドルの写真集を何冊も手掛けていて、かなりの売れっ子だった。

「ああ。今日は集合写真を何枚か撮るだけだ」

今日の撮影は漫画週刊誌に載るらしく、この中から読者投票をして、次の号の表紙を飾る娘を選ぶそうだった。

匠自身は、グラビアや人物を撮影するポートレートには、始めはまったく興味がなかった。雑誌で入賞したのは風景写真がほとんどだし、編集者の人からアシスタントのバイトとしてここを紹介されたときは断ろうかと思っただけだった。

「匠。パツと見、どうだった？」

「え？そうですね」

何かしら勉強になるだろうと思って始めたバイトだったが、風景撮影とは違った面白みを見つけた。中でも人を見る目は、ちよつとずつ付いてきているように思えた。

カメラの前に立ったときのタレントの態度や表情を見てみると、どんな気持ちで望んでいるのかが分かってきた。出来上がりの写真を見てもそれは明らかで、中にはグラビアなんて小さな仕事だと思いい、嫌々やっている娘もいる。そんな写真を見ると、顔は笑顔で可

愛かったとしても醜い内心が見えるようで訴えかけてくる物がなかった。

反対に、どんな仕事でも全力で取り組む娘もいる。そういう娘の写真は、とても良い感じに仕上がり、匠としても良い仕事をしたという気分になった。

「パツと見たと一人、良いなと思う娘がいましたけど。ショートカットで小柄な」

さつき挨拶を二度してくれた娘だった。

「そうだろ。俺もそう思ったんだ」

納得するように頷くと、スツと立ち上がった。

「よしっ、始めるか」

「はい」

匠は二人のアシスタントと手分けをして、撮影準備の最終確認をする。

「じゃあ、全員セットに二列で立つて。前三人、後ろ三人だ」

「はい」

熊谷の声に全員キビキビと返事をする、読者の目に付きやすい前の方がすぐに埋まる。匠が気になった娘は少々奥手らしく、後ろに回っていた。

「よし、いい笑顔をくれよ」

熊谷がシャッターを切るたびに、微妙に表情を変えたり、ポーズを変えたりしていく。

「うん。そのショート。前に来い。俺から見て右側だ」

「は、はい」

十枚ほど撮ると、場所替えを指示した。後ろに回された娘が一瞬、鋭い目つきでショートの子を睨んだのを、匠は見逃さなかった。しかし、すぐに笑顔になるのだから凄い。これは毎回感じるのだが、みんなこの世界で生き残っていくために、並々ならぬ覚悟でいるのだと思った。

一時間後、無事に撮影が終わり、タレント達はマネージャーに連

れられて帰っていった。

「匠、どうだった」

熊谷が感想を求めてきた。熊谷は匠に目を掛けているのだが、本人は気が付いていない。

「やっぱり、あのショートの娘が良かったと思います。後ろに下げた娘は、なんか作り物の笑顔っていうのを感じました」

「そうか」

熊谷はそれだけ言うと、匠の肩をポンポンと叩いて事務室に引込んだ。匠は後片づけをしながら、ショートの娘が一番になることを期待していた。そして、あの娘ならポートレートを撮ってみるのも良いかなと思った。

片づけが終わると、五時になろうとしていた。日陰になった暗い階段を降りると、再び照りつける陽の下に出た。とつとと帰ってアイスでも食べようと自転車に手を掛けると、話し掛けてくる声があった。

「あのう。鳴海さんですか？」

「え？」

名前を言われて振り返ると、気になっていたショートの娘だった。日傘を持って立っていたその娘の顔からは、汗が流れ落ちていた。

「何で俺の名前を。名乗っていないのに」

「私、遊馬君と同じ事務所なんです。白鳥リオといいます。覚えてくださいね」

「健吾と同じ事務所か。白鳥さん。俺に愛想良くしても、グラビアで一位は取れないよ。写真は俺が選ぶんじゃないんだから」

「そんなこと思っていませんよ。ただ、遊馬君の同級生だから、お友達になりたいなって」

「へ」

下から上へと視線を上げ、ちよつと疑いの眼差しで見た。

「俺に何か用事でも？」

「はい。お話がしたいなと思って待っていたんです。どこか涼しい

お店に入りませんか」

逆ナンを受けているようで変な感じだったが、折角待っていてくれたんだから断るのは悪いと思った匠は、近くにあったカフェに誘った。

店内はガンガンに冷房が効いていて、入ったと同時に身体が軽くなった気がした。

「なに飲む？おごるよ」

匠はメニューをリオの方へ向けて開いた。

「いえ、そんなつもりじゃ」

「いいよ。後で、健吾から巻き上げるから」

「ふふふ。そうですか？じゃあ、これで」

匠はウェイトレスを呼んで、飲み物を二つ頼んだ。

「それで。聞きたいのは、健吾のこと？」

「え？は、はい。やっぱり分かりましたか。すみません」

「いいよ。別に傷ついてないから」

こんなことだろうとは思ったが、本当に気分を害してはいなかった。グラビアデビューをしようとしている娘と話せるのだから役得だろう。

「単刀直入に聞きます。遊馬君には彼女がいるのでしょうか」

「……いるよ」

直球で来たので少々面食らったが、嘘を言っても仕方ないのではありません。つきりと真実を伝えた。

「そうですか。そうですよね……」

「俺の同級生なんだけど、さっきも二人でいるところを見たんだ」

心底、残念そうに聞いていたが、テーブルに置かれたジュースを一口飲んで目をつむると、大きく一息吐いた。

「その彼女って、どんな人なんですか」

「申し訳ないけど、特に親しい訳じゃないからよく知らないんだ。

雰囲気は癒し系だとは思うけど」

「そうなんですか」

どれだけ健吾のことを想っていたのかは知らないが、表情を見る限り、それ程ダメージを受けたとは思われない。

「白鳥さんは可愛いから、いい男が見つかるよ」

「ありがとうございます」

「話は変わるけど、健吾ってどうなの？テレビのことは良く知らないんだけど」

とりわけ厳しい芸能界という世界で、健吾が生き残っていけるのか、同じ世界にいる人に聞いてみたかった。

「どうでしょう。私も駆け出しですし。でも、事務所の人達が遊馬君に期待しているのは分かりますよ」

「へー、今からサインでも貰っておいた方が良いのかな」

「そうですね。きっと有名になりますよ」

店の前で別れる際に見せたリオの笑顔にドキッした匠は、きっとこの笑顔が週刊誌の表紙を飾るに違いないと確信した。リオのサインこそ貰っておくべきだったと、家に着いてから後悔した。

六　く別れく

同時刻の水瀬家。

休日練習の終わった茜が、晩ご飯の前にお風呂で汗を流し、ジャージ姿というおおそ年頃の女の子とは思えないような格好でくつろいでいると、母親が話し掛けてきた。

「茜。あなた色気ないわね」

「何よ。可愛い娘にそういうこと言っかな」

「奥手だった葵がデートで、妹がこんな格好で横たわっているなんて。ああ嘆かわしい」

「私はバスケに青春を捧げてるんだから、これで良いの！！今年は全国だつて狙えるんだから」

ここ数年はベスト四止まりだった夕風だが、その原因として、連戦を勝ち抜くために大事なベンチメンバーの層の薄さが指摘されていた。そこを全中に出場経験がある一年生の二人がベンチ入りをしたことで補った。その二人の内の一人が、茜というわけだ。

「で、その葵は、まだ帰っていないのかしら」

「まだだよ」

母とのおふざけモードから一変、さも不機嫌そうに言った。

「葵のお付き合いに、まだ反対なの？」

「本心はね。でも、こう毎日楽しそうにしているのを見ると、葵にとつては良かったのかなって思う」

「あら、大人になったわね」

「まあね。そろそろ帰ってくるんじゃないの」

仕方なく受け入れているが、遅くなることは話は別だ。

まさかあの男、変なことしてないでしょうね。

健吾は少しずつ忙しくなってきたらしく、今日のデートも久しぶりだったらしい。

まだキスはしてないって言ってたけど、力づくでいやらしいこ

とされてないでしょうね。あんなことや、そんなことや。

「わあ」

突然、変な声を出して荒い息を吐いた。悪い方向に考え出すと、いらぬ邪推で頭がいっぱいになってくる。

「びつくりした。どうしたの？」

「な、何でもない。あれ？」

特に見ていたわけではないテレビ画面に、健吾の姿が映っていた。九月から始まるドラマの番宣のようだ。

「なんで出ているの？いまデートしてるんじゃない。あつ、録画か」

「なになに、この中に遊馬君がいるの？どれどれ」

健吾の顔を知らない母は、画面にかじり付いた。

「一番端っこに座っている奴よ」

「あら、いい男じゃない。ドラマは脇役みたいだけど」

「当然でしょ。まだ駆け出しなんだから」

「でも、宣伝に出てくるなんて、期待されてるんじゃないの」

「どうかな」

確か、つい二ヶ月前はガヤをやっていたという話をしていたから、大きな前進かも知れない。その時、誰かが階段を上がる音がした。

「葵かしら」

「行つて来る」

無事だったのか気になった茜は、居間を出た。玄関には葵の靴があったので、葵に間違いはない。今まではデートから帰ってくると、さも楽しかったという感じで、陽気に「ただいま」と言っていたのに、今日は気が付かないほど静かだった。何か嫌な予感があった茜は、ドアを三回ノックして、「お帰り」と言ったが返事がない。

いくら姉妹といえども押し入ることは出来ない。

しばらく突っ立っていると、微かに声が聞こえてきた。

「うつうつうつ」

嗚咽が聞こえてくる。

我慢できなくなった茜は、返事を聞かぬまま中に入った。

「どうしたの？」

枕に倒れ込み、声を押し殺すように泣いている姉の姿を見て困惑してしまう。

横に座って背中をさすってやると枕から顔を上げたが、その目は茜を見てはいなかった。どこを見ているのか分からず、宙に浮いている風だった。

どう声を掛けて良いのか言葉を詰まらせていると、今度は茜の太股に顔を埋めて大声で泣いた。泣きたいときは、全部流した方が良いと思った茜は、しばらくの間ジツと泣き止むのを待った。

何分経っただろうか、泣き疲れたのか枯れ果てたのか分からないが部屋に静寂が訪れた。

「何があったのか話してくれない？」

「今日ね。映画を見たの」

「うん」

「その後、カフェに入ったの」

「うん」

「夏休みには、どこに連れて行ってくれるのか楽しみだったの」

「うん」

「そしたら……、そした……ら。別れようって」

茜は目を見開いた。

「別れ話をされたの？」

葵は黙って頷いた。

「理由は？」

茜の語気が荒くなる。

「分からない。ただ、私に飽きたって……」

「飽きた？　どういうことよ」

茜は、徐々に声が大きくなっていったのに気が付かないほど興奮していた。伏せていた葵の身体を抱き起こして問い詰めた。

「分からないよ。分からないの」

葵は両耳に手を当てて髪を振り乱す。

「あの男。葵を泣かせるなんて。許せない」

茜は部屋に戻ると、鞆から携帯電話を取り出して梨奈の番号を検索した。

「え」と

夏休み前に、親からやっと許しを得て手に入れた携帯の操作に手こずる。

「これだ」

はい、茜。どうしたの？

事情を知らない梨奈は、脳天気な声で答えた。

「梨奈。遊馬君の電話番号、知ってる？」

え？知らないよ。

「何で知らないのよ」

そんなこと言われても。あいつが、どうかしたの？

「どうもこないわ、葵を振ったのよ！！」

え？ホント？

梨奈は驚くとともに、頭を切り換えた。

「ホント！！だから番号」

分かった。友達に電話して、知っている人を探すから待っていて。

「お願い」

じゃあ。

「早く、早く」

携帯を見つめながら、つま先をトントンと踏みならす。

「そうだ。メモメモ」

紙とペンの用意をしていると、三分も経たないうちに梨奈専用の着信音が鳴った。

茜。分かったよ。いい？

「うん……うん……。ありがとう。また電話する」
分かった。

梨奈との電話を切ると、すぐに走り書きした番号を押した。

「何て言ってやろう」

頭の中を、ありとあらゆる罵詈雑言が駆けめぐる。しかし、呼び出し音が三回鳴った後、留守番電話に切り替わった。

「何で出ないのよ!!」

「……ご用件をお話し下さい」

代わり映えのない機械的なアナウンスが流れる。

「水瀬です。何で姉さんを振ったのよ。飽きたって何なのよ。ちゃんと理由を言いなさい。明日、学校来るんでしょね。待ってなさいよ。あつ」

言い終わらないうちに、ツーツーと虚しい通信音が鳴った。

「短いよ。もうっ」

携帯を閉じると、壊さんばかりに握りしめた。茜は鼻息も荒く、どうやって問い詰めようかと頭を巡らしていると携帯が鳴った。

「はい」

茜。どうだった？

梨奈は茜からの電話を待てなかった。

「留守電だった。明日、あいつを問い詰めるよ」

私も行く。

あれだけ大丈夫だと保障した手前、黙っているわけにはいかなかった。

「じゃあ、授業が始まる前に、あいつの教室を襲撃するから」

分かった。

電話を切ると、葵の部屋へ戻った。すると泣き疲れたようで、着替えずに寝入っていた。

茜は床に膝をつき、まだ頬に残っていた涙を指ですくうと、大切な人の髪の毛をそつと撫でた。

七　　転機

翌日、いつもより早くに登校した茜は早速、梨奈の教室へ迎えに行った。

「梨奈。来てる？」

教室に入るやいなや叫ぶと、他の生徒から注目の的となった。そして梨奈へと、みんなの視線が移動する。

「おはよう。遅いよ、茜」

とつくに来ていた梨奈は立ち上がると、机の間を駆けた。いったい何事かという疑問を教室に残して出ていく。

「葵ちゃんは？」

「休むって」

「そう。仕方ないか」

初めての失恋は相当ダメージが大きかったらしく、昨夜は風呂とトイレ以外は、食事もせずに部屋に閉じこもっていた。今朝も朝ご飯を食べず、茜が家を出るまで部屋から出てこなかった。

「修復させるつもりは全然ないけど、落とし前はキツチりつけないと」

いきり立つ茜とは反対に、梨奈は冷静だった。もちろん葵を振った健吾のことは許せないし、自分からも言うことはある。しかし、茜が暴走しないように、いざとなったら止める役割もあると認識していた。

教室の中を覗くと、健吾はすでに来ていた。席について友達と何やら話している。その笑い声が茜は気に入らなかった。なぜ笑っているのか分からないのに、勝手に葵のことを笑っているのではないかと勘ぐってしまう。

何も言わずにズカズカと入っていくと、健吾の横にいた生徒を押し退けて前に立ち、思いつきり平手打ちを喰らわした。

隣の教室にまで聞こえたであろう大きな音だったにもかかわらず、

健吾は何も言わずに茜を見た。周りは何が起こったのか分からないまま、成り行きを見守っている。

「何か言うことはないの？」

「別に。ないな」

「何ですってえー！」

「待つて」

梨奈は今にも掴みかからんとする茜を、腕を出して制止した。一見、冷静な判断だったが高実は、健吾の言葉に激昂していた。冷静でいるという思いはあっさりと破られ、茜とは反対の頬をぶった。

「遊馬君。私に言ったよね。悲しませることはしないって」

「それは、すまないと思ってる」

健吾は梨奈から目を逸らして言った。

「言いたいことは、それだけなの？」

再び、梨奈の身体を押し返して茜が詰め寄ると一瞬、目を上げたが、すぐにまた伏せた。その時、健吾が何か言いたそうな雰囲気を出したのを梨奈は見逃さなかった。

何も言わなかったので、茜が問いたただそうとすると、今まで傍観していたクラスメート達が健吾の擁護に割って入ってきた。

「雲雀。お前も元芸能人なら分かるだろう」

「え？」

梨奈はいつの間にか自分達を囲んでいた取り巻きの顔を、グルッと見渡してから健吾の方を見た。するとハッとして、一息吐いた。

「分かったわ。行きましょう、茜」

「なんで？まだ理由を聞いてないじゃない」

「いいから」

ごねる茜の腕を掴んで、強引に廊下へ連れ出した。

「何で帰るのよ。梨奈は納得したの？」

「いずれ分かるよ」

「いま知りたいの」

梨奈は地団駄を踏んで戻ろうとする茜の身体を羽交い締めにして

抑えた。

「いいから。この件は、ここまで。遊馬君も苦しんだと思うから」
梨奈が推測する別れた原因を話しても良かったのだが、何を言っても納得しないだろうからと思い伏せておいた。

自分達の教室に戻るまでの間、梨奈に向かって愚痴を言い続けていた茜だったが、健吾も苦しんだという言葉を信じてこれ以上追求することはやめた。ただ、葵に言った方がいいのか、それが気がかりだった。

健吾と葵が別れたことは、その日のうちに学校中に知れ渡った。
驚くことに、それを聞いた女子が早速、昼休みに健吾に告白したという話が聞こえてきた。

それらは全部、断ったようだが、その時の言葉も同時に噂になった。

卒業するまでは、彼女は作らないことにしたんだ。

茜にとってそれは、唯一の救いだった。

茜はその日の授業中、いつにも増して勉強が手に着かなかった。
初めての恋がこういった形で終わってしまい、当然、初めて失恋した葵をどうやって励まそうかと頭を悩ましていた。

こうして離れている間に、ずっと泣き続けているのではないか、家を出たりしていないか、最悪なことをしていないかなど、悩み出したら切りがなかった。

よっぽど早退しようかと思ったのだが、部活までやってくるようにと母親に釘を刺されていた。

昼休みになってもテンションが低い茜は、なかなか弁当が喉を通らなかった。

「学校が終わったら、私が行ってみるよ」

昼食と一緒にしていた梨奈がそう言ってくれたお陰で、遅かった箸の動きが少しだけ早くなった。

茜は部活が終わると、急いで着替えて学校を出た。もうすぐ陽が沈む薄暗い中を全速力で走った。梨奈が行ってくれたとはいえ、葵のことが気になって仕方なかった。

「ただいま」

靴を脱ぐと階段を駆け上がり、葵の部屋のドアをノックした。

「葵、いる？」

「……うん」

「入って良い？」

「うん」

そつとドアを開けると、顔は泣き腫らしていたが、意外に落ち着いてた雰囲気ですわっていた。

「大丈夫なの？」

「うん」

「梨奈は？」

「今さつき帰ったよ」

「そつ」

「ご飯、作るね。何か食べたいの、ある？」

「何でも良いよ」

「そつ。買い物に行つてないから、あり合わせで作るんだけどね」
姉妹なのに、ぎこちない会話を繰り返す。励ますつもりだったのに、適当な言葉が見つからない。

「ねえ、葵。きつと……」

「ん？」

「もっといい男が現れるよ」

「ふふ。そつだね」

もっと引きずっているのかと心配していたが、表情は暗いものの立ち直っているように見えた。励ましの言葉に微笑んだ葵は、立ち上がって台所に向かった。

「梨奈は、何て言っただろう」

親友の言葉が気になったが、姉のためにもこれ以上、今回のこと

を口にすることは止めることにした。

一時間後、葵に呼ばれて食卓に着くと、あり合わせで作っただけでは美味しそうな料理が並んでいた。さすが、料理番組で優勝しただけある。

「いただきます」

「いただきます」

いつもは食事中によく喋る茜も、今晚ばかりは黙々と食べていた。箸の音とテレビの音だけが部屋に響いていた。

宿題も終えて後は寝るだけになった葵は、机の上にあった鏡を覗き込んだ。前髪を整え、口元を緩めてニタツとしてみる。

「気持ち悪い」

ベッドに移動して倒れ込むと、大きく一つ溜息を吐いた。梨奈が来たときに言われたことを思い出した。

部屋に閉じこもり、何もせずに座っていた葵の身体を包み込むと、優しい声で言った。

「これは私の推測なんだけど、遊馬君は葵のことを嫌いになったんじゃないと思うの」

どこか奥底に沈んで、止まっていた葵の心が動いた。

「私も芸能界にいたから分かるんだけど、売れ出すと事務所から恋人がいるか聞かれて、いれば大半は別れさせられるの」

それは、葵が芸能人と付き合うと言った時点で気が付くべき事だった。

「ごめんね。こんな基本的なことを忘れているなんて、私が早くに気が付いていれば、付き合ってみればなんて勧めなかったのに。ごめんね」

梨奈は慰めに来たのに泣き出してしまった。その涙声を聞いて慌てた葵が、逆に慰める

「ありがと。私のために泣いてくれて。その話が推測だとしても

良いの。たった二ヶ月だったけれど楽しかったし、それで良いの。
後悔はしていないから」

涙で目が赤くなつた梨奈を、ギュツと抱きしめた。

何分、泣いていただろう、やっと落ち着くと、お互いがお互いを
慰め合うというシチュエーションに顔を見合わせて笑い出した。

「そうそう。葵ちゃんは、そうやって笑っている方が良いよ」

「うん」

「そうだ」

梨奈は何かを思いついたのか、葵の手を取って上下に振った。

「ねえ、葵ちゃん。葵ちゃんも芸能活動してみるっていうのは、どう？」

「え？芸能活動って、……私が？」

「うんうん。それが良いよ。どんな理由があるにしろ、振ったことを後悔させようよ。葵ちゃんは可愛いんだから、もっと魅力的になつてさ」

一人で盛り上がり暴走気味になっている梨奈を見て、葵の表情が青ざめてくる。

「まずはモデルとしてカメラマンの人に紹介してあげるから、今度の日曜日、空けておいて」

「モデル？そ、そんなこと出来ないよ」

「大丈夫だよ。決まり。もう決めたからね。絶対、空けておいてよ」
「そんな、ダメよ」

「ダメ。落ち込んでいる暇があつたら、色々なことに挑戦した方が
良いって。キャンセルは受け付けないからね。じゃあね」

何度も嫌だと言っているのに聞く耳を持たずに決定すると、部屋
を出て行ってしまった。

というわけで、鏡の前で笑ってみたのはモデルをやるう言われた
からだつた。

「強引なんだから」

まあ今となつては、その強引さに感謝していた。

梨奈の言うとおり、いつまでも落ち込んでいるなんて時間がもつたないし、モデル経験なんて、そう縁があるものではない。しかし、興味が始めた葵であつたが、どうしたらいいものかと頭を悩ませていた。

プリクラは茜に付き合つて写したことがあるが、いつも「ほら葵、いい顔して」と言われる。

「そうだ」

葵はふと、匠のことを思い出した。写真部の匠なら、モデルのやり方を教えてくれるだろう。せっかくプロのカメラマンに撮ってもらうのだから、アドバイスが欲しかった。

「ねえ、葵」

そろそろ寝ようとしていると、ドアの向こうから茜が声を掛けた。

「なに？」

「早く元気になつてね」

「うん。ありがとう」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

葵は、姉思いの妹に感謝しながら眠りに就いた。

七　く　転機　く　（後書き）

公募作執筆のため、しばらくお休みします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245a/>

ハート・フィール

2010年10月9日11時41分発行